

ぜんこうもくひょう
全校目標

GROW UP!

～みんなとそだてるココカラの木

じんけんけんしゅう ほうこく 人権研修の報告1

8月25日、NPO法人ピルコンより染谷明日香さんをお招きし「家庭と学校が連携して行う性教育」と題して、講演会を開催しました。今年度、初の取り組みとしてPTAとの共同開催ということで、講演後短時間ではありますが座談会を行い、日ごろ気になっている子どもたちの「性」について情報交換しました。当日は、緊急事態宣言の影響もあり、参加できなかった保護者の方もおられましたが、質疑応答も保護者様から積極的に行われ、有意義な時間となりました。今回のPTだよりでは本講演内容とピルコンよりご案内いただいたコンテンツについてご紹介したいと思います。



講演会口テーマ ～家庭と学校が連携して行う性教育～

日本の性教育の課題・・・

講演の冒頭「みなさんは学生時代どのような性教育を受けられましたか？」という問いかけがありましたが、「これだ!」とピンときた人はそんなに多くはないのではないのでしょうか?本校でも、「性に関する教育」の全校実施当初は正直この点が大きな不安材料の一つでした。一般的な教科が学習指導要領に定めがあり、いつ頃(学年)どのような内容の学習を行うということが決められています。しかし、性教育についてはそういったものはなく、どうしても教員のこれまでに得た知識や経験に頼りがちになってしまいます。また、これまでのこうした日本の乏しい性教育や性について閉鎖的な文化も手伝って教員でさえ「性教育」=性交渉や「性教育」=秘め事で教えるのには不向きであるという偏ったイメージを持ちがちだったことは言うまでもありません。

せいじょうほう はんらん
性情報の氾濫



せいじょういく ぶそく
性教育の不足

上の図にあるように、現代はインターネットの普及や携帯電話に代表されるような情報端末機器の定着で、だれでも簡単に性情報に触れることができてしまいます。中学生以降では性についての情報源は親ではなく、インターネットや友人だそうです。ここで問題になるのが、その情報が多い場合、正確でないということです。ひどいものでは「性暴力=性行為」という誤解を与える表現もあるようです。実際に染谷さんのお話にも「子どもたち見ているSNSの景色は大人が見ている景色とは違うことを知らなければならぬ」とありました。こうした時代動向に、果たしてこれまでの性教育が十分に教育としての役割を果たしているかという、甚だ疑問が残るのではないのでしょうか?

世界基準の性教育・・・

国連教育科学文化機関(ユネスコ)は2009年に各国の研究成果を踏まえ、世界保健機構(WHO)などと協力して「国際セクシュアリティ教育ガイダンス」を発表しています。カテゴリーは1「関係性」、2「価値観、権利、文化、セクシュアリティ」、3「ジェンダー」、4「暴力と安全確保」、5「健康と幸福のためのスキル」6「人間の体と発達」、7「セクシュアリティと性行動」、8「性と生殖に関する健康」があり、それぞれのカテゴリーでレベル1～4に分類して表記されています。ちなみに、8「性と生殖に関する健康」では以下のように学習内容を提示されています。

レベル	内容	具体的内容
1 (5～8歳)	○赤ちゃんがどこから来るのかを説明する	<ul style="list-style-type: none"> 卵と精子が結合して赤ちゃんができる 排卵、受精、受胎、妊娠、分娩など多くの段階がある
2 (9～12歳)	○どのように妊娠するのか、避けられるかを説明する ○避妊方法を確認する	<ul style="list-style-type: none"> 無防備な性交は、妊娠やHIVなど性感染症にかかる可能性がある 常にコンドームや避妊具を正しく使用すると、意図しない妊娠や性感染症を防げる 低年齢での結婚、妊娠、出産には健康上のリスクがある HIV陽性者の情勢も健康に妊娠で見、赤ちゃんへの感染リスクを減らす方法がある
3 (12～15歳)	○妊娠の兆候、胎児の発達と分娩の段階を説明する	<ul style="list-style-type: none"> 妊娠には検査で判定できる兆候や症状がある 妊娠中の栄養不足、喫煙、アルコールや薬物使用は胎児の発達へリスクがある
4 (15～18歳)	○生殖、性的機能、性的欲求の違いを区別する	<ul style="list-style-type: none"> パートナーとの性的な関係で、双方の合意はいつも必要 意図しない妊娠や性感染症を防ぐ方法を事前に考えることが必要 すべての人に生殖能力があるのではない。不妊に取り組む方法がある

今回は、世界基準の性教育についてご紹介しました。

つづきは次号にてお知らせします!

